星月夜顯晦録

六編

壹

へ遠13
2208
26

門へ遠13
編2208
26

高井蘭山翁輯録　六編　五冊
有坂蹄齋老人畫　全部　卅冊

星月夜顯晦録

書賈　江戸　文溪堂
大阪　羣玉堂

星月夜顯晦録六編題言

抑鎌倉故右幕下薨給ふ后二代三代の間治平ゑ亂あゑ是何ゝ故ぞ上に牡雞晨し。下ゝ亂臣志弑專にせられぞなゑ君聰敏ゝ在ゑども君ゝ權を失ひ其柄疾臣下ゝ握ゑ遠原光精忠ゑ良臣ゝまゝども。奸者忌妒し。佞士横り妨て其心上に達ゑず虛く歯を切足顯晦録弑

著て後世に明なるもの所以なり。
顕とゝ秩父重忠泉親平大江廣元和田
義盛荏柄胤長一味の面々おゝむね北條
泰時局松島辺晦とゝ梶原景時稲毛
重成比企義員由利惟久北條時政同
牧の方義時以下の一門讒謟面諛
奴隷と成族三浦義村を肇皆是那利
就中上に二位尼公曉惡禪師あり
鎌倉山の星月夜淨き井水の清き濁り
明細に穿竭努ゝ兼ゝ忠臣列婦の行ふ
處を鑒とし乱臣賊子の為所を禁らゝば
善を勸悪を懲す一端なるべし
文政九年きさらぎ半芝伊皿子の隱士
高井蘭山翁書窗の下に誌

星月夜顯晦録六編

惣目次

卷之一

○禪師公曉右大臣実朝公を討
同圖
惡禪師公曉備中阿闍梨の坊へ入る圖
○長尾定景三浦義村悪禪師公曉を誅に
公曉剛勇働事
実朝公の御墓落飾の圖

卷之二

○阿野冠者謀反ゐ依滅亡新君鎌倉御下向
荻野景員河越重時四郎時元と擒圖

○頼茂謀反滅亡尼公昊夢を蒙
伊勢太神尼公の夢ゐ大乱を告る圖
白拍子亀菊仙洞へ愁訴の事

卷之三

○後鳥羽院義時誅伐御企鎌倉勢發向合戦
佐々木四郎左衛門尉信綱宇治川先陣の圖
○官軍敗北鎌倉賞罰の沙汰有て四海静謐を
後鳥羽院亀菊明石の浦ゐて詠歌の圖
恭時新君頼經卿を補佐て太平を致を事

附録上之巻

○宇多源氏佐々木一統の繁茂
但 太郎定綱次郎入道經蓮三郎入道西蓮四郎高綱五郎
入道心願五家各嫡庶数家に別るゝ説
○畠山源平二流の説
並 悪僕恋窪の遊君を欺く圖
武列恋窪の遊君の為に秩父重忠が殉死せし俤
當時近路傍に現在せ
○実朝公風流の再話
○巴女の父兼遠并樋口今井が傳
土民義仲公の亡軀を葬る圖
附録下之巻
○巴女の傳
於鎌倉邸殿勇力の圖
○鄙女裸馬に乗圖
○女子覬奥を取圖
○信列木曽福島の駅馬市の圖
隣々男女風俗の話
○朝比奈三郎義秀再説
○荏柄平太亂長ら死の確言
○熨川流水内郡条路橋の圖
彌太郎が瀧の矢

星月夜顕悔録六編總目次畢

鶴岡若宮別當禪師公曉

鎌倉羽林頼家卿御子幼名善哉
頼朝卿ハ御孫ニ元久元年七月八日
四歳ノ時羽林生害其弟実朝公
鎌倉家ヲ嗣玉フニ建暦元年九月
三井寺ハ僧正ノ弟子トナル
去名公曉建保五年六月鶴岳
別當職ニ補セラレ同七年正月廿七日
父仇トテ実朝ハヲ鶴岳ニ害シ
長尾新六平定景ニ誅セラル
十九歳

夕電刎鋒鋭
朝露即永消

三浦平六兵衛尉平義村従五位下
同夫人 駿河守重
和田毛盛ノ従父兄弟ニテ
三浦大助義明庶流ナリ鎌倉
草創ノ元臣ナレドモ善哉君ヲ
目ノ敵ノ餘毛盛ト不快ニテ門ノ
討ヲ北條家ニ訴ヘ且栄花ノ
究シカ三十餘年ノ後
其嫡子若狭守泰村ノ
時代宝治元年六月
五日謀叛ニ依テ父子
兄弟一族五百餘人
法華堂ニ自害シ
滅亡セリ

誰知舐犢愛
遂育虎狼雄

鎌倉四代頼經卿

光明峯寺関白道家公三男也
実朝公事アルノ処御嗣ヲキ
ユヘ京都ニ申ウケ此君ノ迎フ
暦仁元年三月權大納言
寛元二年四月御子頼嗣卿
ヲ立出家シ玉ヒ康元元年
八月十日薨頼嗣卿ハ治世
九年メ歸京此節武特ハ
親王家ト向マシマセリ
此光明峯寺関白左大臣
藤原道家公三男御幼名
三虎君実朝公ハ又従弟也

甚四郎昇平天
下盛饮逢日
月清明時

頼經卿御臺盤所

鎌倉家二代羽林
頼家卿ノ御女ニテ
公暁ノ妹君ナリ二十八歳
御婚姻三十二歳ニテ
夢レ玉フヘ鎌倉ノ血脈
コヽニ現ヌ

失史星月井
とゞさゞ鎌倉山

星月夜顯晦録六編卷之一

目録

○禪師公曉右大臣実朝公を討
同圖
惡禪師公曉備中阿闍梨の坊へ入る圖
○長尾定景三浦義村惡禪師公曉を誅に
公曉剛勇働の事
実朝公の御臺落飾の圖

星月夜顯晦録六編卷之一

禪師公曉右大臣実朝公を討

國家將に興んとするとき祯祥あり。國家亡さんとする時は妖孽あり。天は寢妖を現し。地は異怪を示す。固是天地生靈を憐愍の故なり。人君宜く身を顧眄て非を改悔行を謹慎て德を修施バ天変地異其応ある災害自ら消滅べし。是を妖ハ人くを勝ずといふ。実朝公聰明の君に在せ〻ば忠臣亡び奸臣蔓てハ賢德日くに落く去冬尤沈天変現ずるに慎を加へられば鳥雀凶を示ハも唯他のことに似ず大江入道覚阿ハ先考頼朝々々も信用厚く政道の師範と定め〻寛仁の君子なる其諫も聽入る。千乘の重さは身大勢の公々武臣に傳ふ千萬の士卒に囲饒せれ

社糸行五の壮観衆目を驚しのみも只是屠所の羊の歩
ちと知ぬれぞ是非なけれ。実朝公小野の御亭より。八幡の宮
前より帰りの夜陰に及て神拝を遂のべ。伶人楽を奏し
祝部鈴を振て。神慮を勇めなる事畢て神宮寺を出さ
せ下向に及せのへ折節下るの橋の傍に白き薄衣引暦なる女
房の君を指覩やうのくぜくとは副へ寄らと見へ〳〵。衣の下
よりと氷のごとき太刀を持て。親の歓えらと切かくる。実朝公笏を
以清めへた。二の太刀に切伏れ首を取んとする由。文章博士仲章
是へ狼狽と云処を一太刀に切殺さる。伯耆守師憲太刀を抜て
裾をく切つけられ深手を負て倒伏るが翌日まで死〳〵けも
れ身近く人なけとば君の御首を付落〳〵提て逐電に是則當山

の別當公暁悪禅師と此時君ハ二十八歳禅師ハ十九歳とやの真〳〵
叔父甥の仲中なるに悪縁のくるる遥に和在〳〵供奉の
面〳〵走まり武田五郎信光を肇声くみ呼て。隨兵ホ走散て尋
求れども。夜ふとい。雑人の呼ると知ぐく各唯狼唄回る計ぞ
別當公暁が所業ぞとて〳〵けるに雪下の本坊に推寄ければ門徒
の悪僧ども。何るぞと防戦ふ程に或ハ討れ或ハ生捕れ
て悉く坊中へ乱入〳〵。鬨ども。別當在ざれば後に天井を引破床
板を毀離〳〵。椽の下を需れども知ざれバのうせ去ぬ。
後陣の隨ども一山の外面を取囲ぐ曲者を落すまじと騒乱
を巍〳〵。行列の作法も乱れ公々殿上人ハ歩跳にまり。冠を落せ
ども拾ひ及ぬ笏を失ひ裾を踏れ周章目も遠られざる形勢に扱

禪師
公曉
実朝公
を
討圖

又鶴岡よりも所迫往還横乃夜ゐるくも物の群集ゐく。雅を立べ地もちるゐ不時の騒動ゐ依て人馬東西ゐ馳違ゐ老男女諸倒され蹴散され街ゐ死するゐの類し此るゐ所へ注ゐ及べ。件墓ゐ尼公おゐそもいるるのごと驚きのし。諸臣所へ馳ゐるもあり。鶴岡へ弘ゐもあり。鎌倉中ハ一時ゐ黒闇とるて。上を下へ騒動さる中。卑賤の下くゐ堀を失ひ心を悼る耳。時ゐ悪禅師公曉ハ後ゐ備中阿闍梨の許へ来て我年来の本望を達せ〜と仰けまべ。阿闍梨肝を消し此坊ゐ至てゐ為悪ろゐ和ん。然ハ今更ゐてせん早く三浦義村を頼ゐくとヤゐそ腹心の家臣源太兵衛と云者を使て〜く。義村ゐ許へ仰入られけゐ。我父頼家卿奸臣ハの所ゐるゐ世を狭られ閑居しゐゐのをるゐ。終ゐ自害ゐ及はゐ頼家卿を廃せべ。我おゐそ其嫡子これべ鎌倉の家督ゐる所ゐを。実朝ゐ押領せられ。無念骨髄ゐ透とゐ〜ぞし。尼公の仰ゐ依て一旦佛門ゐ入されハ昼夜父の仇を忘ず。今や時節を待ゐく。年来の本懐を遂ゐて。我元来源家の嫡孫これべ孫倉の家督違論有べゐるゐの。急ゐ計畧を巡ゐし。孤權ハ職ゐ於ハ其方へ任ゐんとありける。三浦平六兵衛義村是を聚て大ゐ仰天し。始て和田義盛ゐ詞ゐ当て我唯養育の愛ゐゐゐ。義盛人情をゐぼて怨しハ全く我智ゐの足ざる処。其節早く義盛ゐ言ゐ隨べ今日の大変ハるまじと。後悔ゐ限ゐく。和田ゐ明察を感し入我一族を離義盛を捨しも元此故ゐ今我死ゐも何の面目ゐく。義盛ゐ地下ゐ入べ〜し此上ゐ

人をみけぎ我公曉を誅戮し責くのト沢みせんものと覚悟し使み答るハいしくも斗ひなみのゑ此上ハ某ぐ方さみる今み迎の兵を進せんと。我方へ入せゑと云送美村急み小条美時ゞ舘み独ゑく此るを告けるみ美時不労み依く鶴岡より帰糸し。平臥の躰ちれた大寝る丈寝所み於て對面し大み驚るゑる躰みく。ハ大変唯今素処へ某急み不快丈。是非ちく供奉と云ゑく帰宅み及今みるゑく心身煩悶せ。我ハ傍み在ものるとゞ争ぐ君み過さ世ちゑん。残念とやもうゑと大み愁傷を顕し。討ものを向る相談を遂彼別當ハ世み勝る大力の勇僧ちれゞハ道能くゑ虚みるく。早く討みを差されよとやる丈。美村其器みあるる者を撰長尾新六然ゞしとく。是を命ゞ二陳ハ三浦美村と定む長尾定景異儀み及ぐ早速用意し。大剛の力士雑賀次郎ちゞゑる郎徒二十餘人を相具し。三浦ハ弓箭を携へ家子三十餘人を引卒し。定景み謀計を示し両人等しく駈向ひ備中阿闍梨の坊みく公曉を尋んと急ける。此時鶴岡みくハ餘りの混乱夜中同士討出来根子丈ハ北条泰時今日の惣換抜佐く木廣綱山城行村み談ゞ。公卿殿上人ハ供奉の面くみ警固させ。丈退去せし兵隨兵の面くと伝呼別當行親泰時佐く木と山城判官のゑ残く。其餘ハ一人も残らゞ退散せしむる丈暫時み静ける。禅師公曉ハ三浦ゞハ答を安ゑ。大み悦びたしけるゞ本坊へ大勢打入く。乱妨狼籍寄もつれゞ其外隨兵丈小くみ散走し捜求る丈甚心を若めるひ美村ゞ迎遅しと待詫く。鶴岡の峯

續を独測ちぐら美村が方へ行んとしゐども。最早大勢退散し
て人ゐ紛るゝと叫ぶ外面ハ兵士油断ちなく。取巻うるとゝへけるゆゑ。
進退谷まり忙然と踟躕ゐる。長尾三浦備中阿闍梨の坊ゐまゝ。
公暁を雷ゐちぐら故其行方を相尋ねた知ぶとヤ。長尾が
郎等ハ大ゐ怒て。坊中片ゝ搦捕んと間を定景美村是を制
し。美村先阿闍梨を呼出し。貴僧早く公暁が在所をヤされ。
我方へ使を越さるゆ。彼ハ陳ぜるゆ。於て後日の罪
科重ねゝ。とヤ。阿闍梨止ことを得ぬ答へいなく。禅師等
く我本宅を達せしと宣ふ其躰片ゐ首を提片ゐ血ゐ
滴る太刀を振ゝ入するゆ。驚入られたせんえ。欺嫌し
ちゐ早く美村へ頼きされとヤせん。

兼て此乳母の所縁も有ゆ。禅師の使立帰ゝ美村ゝ
出迎の武士今ゐ来いらんとヤゐ。今方迫待花居ゆ。
忽首を引提征ゐ。遠くも行ゆゐ。山つゞきの方ハ出
ふよ。僧ハヤ出りとあるゆ。答へ大勢走り行ゝゐ暁へ
美村が家ゐ到んとされた叫ぶ帰んとしゐゐ処ゐ行合ゝ。何者
ゝと声ゝけゆ。定景態と声をひそめ。三浦美村が出迎の者
たゝと答るゆ。公暁恍ゐ遅ゝしゝとゝ。心を免さゝを。定景
郎ゐ合詞をゝくまゝ。走寄ゝ組付擒んとする処ゐ。公暁ハ無双
の剛力屈竟の若盛ゆ。心ゐゝとゝ力足を踏。組付者の鎧の上
帯ゝの抓ぐ。左右へぐらゝく投付。太刀引抜ゝ大勢の中へ切ゝ
入ゐ。長尾が郎ゐ何程の働ハた。唯き人の法師ゐ

悪禅師公暁
備中阿闍梨の
坊へ入のふ圖

しく生捕んと太刀ハ鞘のまゝ打合。公暁の太刀と敲落さんと四方より取巻打合けるゆ。禅師ハ宛も飛鳥の翔おとくあるゆ顕かゝちゆ隠れ。矢庭ゆ郎ホ三人討死しけるゆ目覚しく働く

長尾定景三浦義村悪禅師公暁を誅す

比ハ二十七日の亥刻ゑ月の光さえちく樹立森〻と鬱〻のゝ間。けれゝ物のあやめ見ゑわけ。公暁の太刀の閃ハさるゝ稲妻のごく。中く生捕んとハ叶ぐさく見ける。ゆゑ。三浦義村後ゆ扣ゑ。しゆ弓ゆ箭を番ひ。ひそくも標的ハ真の間。唯太刀の先を的と定め。寄枝折〻眼を閉心中ゆ和田左衛尉義盛泉下ゆ霊あらゝ。此一筋の箭を以て。我誤を免を免をしと。祭畢て切て発ハ矢疾まく。禅師公暁の額を射鏑けれゝ。浅ゆ射れた血流て眼ゆへ。働の邪ゆ

ちるゆへ度くゆと揚て拭て。是を見て雑賀次郎疾込ぐ寄と組付。公暁振放さんとしゆ。雑賀ハ少ゆ力士ゑ公暁太刀を拉直し衝んとしゆ。雑賀大音ゆ誰成た疾まく我と呼ゆ取ゑやと叫びけれゝ長尾新六定景走ゑて打込太刀ゆ難ちく公暁の首を討落せり。後日ゆ評美ゑて此時雑賀ゆ働抜群と称誉せゝ。公暁ハ衆ゆ超ゑる大力とりひ。武術ゆ勝けれゝ。組付ゑ。生捕ちと難く。他をあざひて夜中討取難ゑんと思ひ我も倶ゆ身命を捨る覚悟ゆく両人ちゝ斬とゝりしハ天晴の勇士ちゝ。公暁の死骸をこゝゆ。素絹の下ゆ腹巻を召さゝける。定景義村禅師の首を持せて、弛帰けれゝ此条義時ゆく呼労快方放押て出仕ある処ゆく早速そ

を実検し。長尾三浦ゞ功を賞し。侍所ゟ出て尼公に暇の
歎をも労ゝ為らせ終夜此所ゟ相詰て萬事取斗ひゟ及ける
大江入道其外高弾の諸士。皆夜通し立騒ぎへ混乱大方ならず
又鶴岡ゟて君の御死骸。仲章が亡骸。伯耆守師憲が負小
野の御亭ゟ舁入て。行親恭時ゟの面々守護し在けるが。三浦も
尾向来て禅師公暁を討取けるべ。隨兵の面々大ゟ残念の歯
噛を為し。我く隨兵を蒙し。何のゆゑや。主君を闇くと討
當の敵唯一人ならゟ。是を尋ぬるに。無用の法師共を搦捕て
のゝゝ寸功ならく。剰禅師ハ此所ゟ討ゟ向し。両士ゟ討ゟれ
ゟの面目あらと此所ゟ帰んと各此処ゟ腹掻切て。君の御供とて
死と申合する程ゟ皆最と哀とて。櫻門の外ゟ列座し。既ゟ自害ゟ

及んとする時ゟ北条恭時此騒を聞て驚て走来て諸士を制
し。各の申合さるゝ処を一理有ぬ。大なる不忠を心付れさや。
某面々へ説安をべる。其是ゟを別しくの上命を捨安
とゝ思ふ。各詞を揃へ我ゝ餘り云ひ合る拳動の口惜ゝれ。殉死
を申合るゝ。併貴辺不忠と申さるゝ一条を義と申ける。恭時が
いつく今夜君の御大変怨敵外より入るゟあらば。諸臣逆心と
掛さるゟあらば。内親の御甥ゟ当山別当の所為とあれば。先以
各の油断と云べらば。怨敵を尋ぬるに三浦長尾が討取て仏今
我能やゝ。三浦へ使を遣され迎の兵と偽て成丈太切
の怨敵を生捕と克ば。討捨られば。彼ゟを討ぬる筋ゝての上
なれば各の勇智足ざるゟ非ず。怨敵ハ唯一人。夜中当山の勝ると

知る忍ぶ上臣。各の不調法少も有り。今君公達も在ぼかる上。先考の仕大業如何成行んや。是ハ安心ち難き時とちれり。此虚よ来る逆恶を巧ののあらぶ。由々敷ハ大変ちるべし。然らば各今捨のん命を全しく。國家の守とちるんあそ先考よりと三代の仕恩公報ぜるの忠ヤもべし。其危をこちぐら。一且の耻とく命を捨るハ頗狗死ハ近く。君の仕歌もるまじと必べ不忠とヤせん。我今述る如悉く非とおれば各了尚次第自害めされと若く敷ヤけ上べ。皆く感伏し。殉死を止く尼公仕墓所の仕ハ猛倉の守をち。萬一逆謀の族もあらぶ身命を拠く。鎌倉ハ不忠を存ちじと。公を決しるり。其く其夜も明ける。実朝公の沼首こちざるの間。一山草を分く捜索れた。更ハ知ざりける故

止ことを得ぼ公氏ハ仕記念とく賜し。仕鬢髪を。仕首の代とな
し棺ハ納勝長壽院の傍ハ仕葬送の営とちける。此君建仁三
年こり今ハ五く治世十七年。いちざ壮年ハも至ちぐ。白刃ハ中
く黄泉ハ埋上。紅栄己ハ枯落しるり。殊ハかく高位ハ昇進
しるふ仕身ハく。仕首もちる仕五体不具の仕葬。仕不徳此上やあらん
世の中ハ闇夜燈を失る公地しく。都より下向あり公殿上人も
涙の袖を絞つ帰洛しるふ。鎌倉こりも加藤次郎景廉をて
実朝公他界のち往進ちける。此度の仕不吉ハ依く。尼公の仕
愁傷一方ちらぶ。老臣ホを集く宜ひける。世の中ハ我程禁者ハ
又もあらじ故殿ハ逢初しこり父ハ疎上。実ちらぬ母の嫉妬を
取人を隨へこりハ平家追討の軍発殿の武運を佛神ハ祈り

六ケ年が程は安き心もなりしに漸天下治嬉しと思ふるもなく。
大姫墓なく成引續く小姫は前に後し時は同じ道にも伴ひくと。
悲めどもひなく年月を送る程に故殿なくなり給へ月日の
影を失ふ心しく。何となるべきと思ひ弱しに幾程なく先の武将生
害を遂給ひ世にもあるべきなく思ひ沈も年月経れば去りの日くに疎
く少しく思ひ忘れしに右大臣殿夢のおとくなるべき三十ゆも足ず失
給ひ公暁は左衛門督殿の忘記念然も戈発ゆく得度の躰鶴岡
に住職されば出家なるべきも未頼母しく思ひしに孫や子は敵同七
ゆくあり。しかるる前世の宿業ぞや。自ら今は誰に引き存命と。
頼なる身の末を。なる口説く歎き給ふ諸臣も心中を察しかねに
打涙ぐみ左右ものもなるに尼公又仰けるは故殿大業成興廢
の古ふるり源家三代の武将其間四十三年は唯夢と覚血脉も絶果
たれば今吾命聊惜らんとなり。若我世をなるべ三代の武将の怨
提は誰が訪なるべきと思へば心後前に迷ひ覚悟をべき道を
日柄も立べ鎌倉のるに各能に相談を遂られと宣ふぞ諸臣中
く帰ぬるる。心を痛給へべ京都の召をも伺ひ能に斗ひに
るんとく。種く慰進せるる。唯く昼夜は涙乾く間なく。追善
佛事の営のみなりしに墓所にも餘りの悲の怨寿福寺
の行勇和尚を戒師に請に。嬰の髪を落しなべ。諸臣の内に
も和泉守親廣。左衛門大夫時廣。駿河守李時秋田城介景盛
結城七郎朝光隠岐守行時を始とし百餘人一同に髪を拂く
入道を。京都にて此度鎌倉の大変に依く洛中の騒動斜なら

実朝公の御臺落飾の圖

ど。此節大内の守護人。江左衛門尉範親病氣ゆゑ去冬鎌倉ゑ帰。大臣拜賀の儀供ゆへ度ゝ上京ゑ及ぶ。近江国頼茂唯一人。六波羅ゑ在けるが。右洛中人心安穏ならざるゆへ。鎌倉へ往進ゆゑ依て。二月伊賀太郎左衛門尉光季。和泉守親廣入道蓮阿。両人を上洛せしめ。取静平定の上。近江守ハ交代ゆゑ。ゆゑ。三人在洛して。諸民を安撫し。京都の儀沈汰として。鎌倉ゑ於てハ先二位の禅尼を武将の代さして。簾を垂て依ゑ国勢を伺しめられ。北条右京大夫えの如く。執権する程ゆへ。事ゑ。駿河国ゑ阿野次郎時元と云人あり。父ハ阿野法橋全成とやて。右大将頼朝卿の御舎弟なるが。出家して。ゆゑの後隠謀の企ゑ。事顕ゑ依て。下野国ゑ流し生害あり。全成が息両人有ゑ。兄ハ世を早くして。次男ハ次郎時元ゆて。阿野冠者と称せしが。親しく内親ゑ。打棄置ける。ゆゑ。此ゆゑ彼所ゑ忍び居て成人して。いつゑもしく世ゑ出たやと思れしが。母ハ北条家の娘なりしゆゑ。故所縁ゑ就て。然るべく取立ゑも頼りなふ。ゆゑ。時執権を續て打捨ありしゆゑ。深く怨られけるゑ。他人の口入成ゑよりて。駿河ゑ聊の所領を賜ゑ。當国の住人となる。実朝公ハ従弟の續なれども。昵近して鎌倉ゑ在住も叶ハず。外様ゑ在て駿河の住人なる。心外千万ゑと。君を怨北条を悪居られけるゑ。今度実朝公を不慮の儀大変。ゆゑ男子も在さるれば。次郎時元蛮ゑ悦び。我運を開ゑ。の時節到来せるゆゑ。今鎌倉家の親族ゑ知るべく。我ゑ起る親身ハあるべからずと。郎等を召て蛮意を申。舎鎌倉へ

ける。鎌倉ゐくハいわざれ家督の沙汰ゐも及ざる処ゐ街ゐ流言
しける。尼公れ戈智ゐ在ばとも。何ぞ國家の政事を専召えん。
早く亡君のれ跡目を定めらんあらば。京都ゐも専ら此支を
風説されば。其餘の国くゑ同しくるべし。幸ひ多くれ。駿列の阿野
冠者ハ左典厩義朝卿のれ孫ゐく。亡君ゐもちさしくれ従泉ゑ鎌倉
のれ跡目是ゐ立てるハあらじと。言流行き程ゐ後ゑ尼公の耳
ゐ入安らぶ召。判官ゐ命じく。閭巷の説をちぶ者を捕へ老
少を厭ば。禁獄せしめらるく故。郎ホ弛帰ゑく時元ゐ此由紙告
ける。時え然ゑば意ゐ跡目の沈汰ハ有まじ。此上ハ義時を亡し。武
将の宣旨をヤ賜んとく俄ゐ砦を築院宣を賜しと号し。近
國の浪人溢者を語きける程ゐ忽数百騎ゐ及近郷を侵しく

糧を奪ける。鎌倉ゐくを時元竜城ゐ及の由聞へければ。尼公以の
外れ心を悼ゐ。諸老臣を召く評義あるゐ義時中上るハ先物
馴こる者と遣し。其実否を尋捜其虚実強弱の程ゐ依く。討
ゐの人数を定ゑしとヤを。大江入道某ゲ愚意左ゐあらば。今
亡君の追福勤終ざるゐ。討ゐの人数を向られんハ然ゑるべ。殊ゐ
公達も在ざれば人の心穏ゐらば。宜く謀を以く欺鎌倉へ召寄カ
士を伏く生捕ゐせば。士卒國ゐ在く事を成難ゑらん其仕方か
やうくとヤされければ各此義然ゑべしと一決し。先金窪兵衛尉
行近を使とく駿列へ向らる。行近来ると雲城中ゐ評義して。
かの者ハさのみ剛勇ゐあらば。恐るゐ足ざる族ゑ軍威を示しく
挫ば却く鎌倉の諸臣を談ゐ。便能とあらんとく。剣戟刀鎗

甲冑旗幕。馬具ホの類を顯しく並兵粮俵積うこね置く。城中へ
案内を。行近此躰を顧く頗驚き用意仰山なるを恐る氣あむ。
さとぞも義時腹心こる佐弁の士史言語ハ他の及所ふあらじ。
よりく此度の使節を蒙こ成ハ阿野次郎時元出迎く上座ホ
請じ。遥こ此使をしく越る条旨苦労千万と挨拶し。鎌倉
の命を義る。時ホ行近ゲいらく。今鎌倉ホ主ちく。武将の此跡目
いくあらんと。諸士落氷を踏の如ひあり。然るホ此邊當国ホ於て
新ホ城郭を構へ浪人等を召集由相ゆへ。是完虚ホ乗じく。
隠謀を企る処ハ疑らんと。尼公以ゑ外憤ホひ某を以内存を問る処
ハ若異心ちるホ於ゑゑ某と倶ホ鎌倉ホ赴く。ト沢致さるべしと
述こうける。時元答こ此不審を蒙る条先以恐入処ハ去ちゑら某

武器を貯。砦を築こ。全以國家の守護を存こ。其故いかんと
あれバ。今君の此変ホ依く。京洛以の外騒動ホ及よ。兼ハ
然バ所る大敵発ちらんも測ゑく。若東海道を指く鎌倉
ホ討入ものあらバ。當地ハ鎌倉の喉領ハ某當所を固一人も入立じと。
聊寸忠を思ハの深志より此義ホ及ぶ。然ハ還此不審を蒙る上ハ
所存先一通物語ト処ハ。但し鎌倉へ出ハ義ハ。却く當地の固を
失ふホ似ゑ。猶此慮ホ及ハこ。先休息しく。ト を行近押返し
く。貴邊ト さる処一理あれた。若其所存有この変ちらバ。ゑ応
鎌倉へ届ホ及び事を討ざるやうゑ。鎌倉ホ至こ。心底一ミ十上
られよとト安。時元ハ退く郎従と評義ホ及。行近ホ酒飯を饗応
休息せ。名置けり